

## 夕暮に語りかけを聞く

上 西 妙 子

ここにある一篇の詩は、夕暮にあって友に語りかける愛の詩である。作者ルネ・ヴィヴィヤンは1877年にイギリスに生まれ、1909年にパリに没した。

Soir

La lumière agonise et meurt à tes genoux.  
Viens, ô toi dont le front impénétrable et doux  
Porte l' accablement des pesantes années :  
Douloureuse et les traits mortellement palis,  
Viens, sans autre parfum dans ta robe à longs plis  
Que le souffle des fleurs depuis longtemps fanées.

Viens, sans fard à ta lèvre où brûle mon désir,  
Sans anneaux, – le rubis, l' opale et le saphir  
Deshonorent tes doigts laiteux comme la lune, –  
Et bannis de tes yeux les reflets du miroir. . .  
Voici l' heure très simple et très chaste du soir  
Où la couleur oppresse, où le luxe importune.

Délivre ton chagrin du sourire éternel,  
Exhale ta souffrance en un sincère appel ;  
Les choses d' autrefois, si cruelles et folles,  
Laissons-les au silence, au lointain, à la mort. . .

夕暮に語りかけを聞く

Dans le rêve qui sait consoler de l' effort,  
Oublions cette fièvre ancienne des paroles.

光は悶え、あなたの膝に息絶える。  
ここに来て、測り知れなくも優しい額のあなたよ  
重苦しい月日の衰弱を抱えて。  
苦しげに、表情は絶えんばかりに青く、  
ここに来て、ながく畳まれたひだの衣には  
今は枯れて久しい花々の吐息の香のみをつけて。

ここに来て、私の思いの燃えるあなたの唇には化粧をしないで、  
指輪もつけず、ルビー、オパール、サファイヤは  
月のようなあなたの乳白色の指を辱める、  
そしてあなたの眼から鏡の影を追ひ払って...  
今、時はとても単純で純潔な夕暮にある  
そこでは色彩は胸を圧し、奢侈は煩わしい。

あなたの悲しみを永遠の微笑みから解き放し、  
あなたの苦しみを誠実な呼び掛けに吐き出して。  
かつての事どもは、無残な狂い、  
それらは沈黙に託して、彼方に、死に托して...  
努めることで慰めを知る夢の中で、  
言葉の、今は過去の熱気を忘れよう。

この呼び掛けは女性に対してなされている（使用されている形容詞が女性形になっている）。その女性は語りかけに耳を傾けるうちに、いつしか、体内によどむ重い月日から、おのが身を引き離してみることの安堵へと誘われるかもしれ

ない。辺りに光は絶えて行く。身の厚ぼったさを教える眼を差すような眩しさも消えて行く。その時、萎れて久しい花の香は、今では空しく消えた願いの形見としてあるのではない。むしろそれは、この今にあって受けるべき、優しさの在りかを指し示しているのだ。

「あなたの無垢を攻撃する、虚しい飾りを取り去って」と声は語る。その声は、今では肌に、そして衣に張りつくような装飾を、女性みずからの手によって剥ぎ取らせるのかもしれない。そうして、少しづつ女性は自由になって行くだろう。自らの姿を映す鏡も追い払った時、女性は、化粧しない肌に触れる空気の率直な力が、また自身のあるがままの単純な力であると知るのかもしれない。そんな時に、女性がまさに身を置くのが、「とても単純で純潔な夕暮の時」なのだ。その夕暮とは、色彩の全てを解き放った女性が、暮れゆく光と親しく溶けあうような自身を感じる時であり、そしてまた、自身を自らの腕の中に取り戻す思いの時ともいえるだろう。

そしてこの時に至って、詩人は女性に向かって命令を下す。「悲しみを解き放ち」、「苦しみを吐き出せ」と。それは、女性の内に残るものが「永遠の微笑み」のみとなり、その苦痛は「誠実な声」に質を変えんがためなのだが、この命令口調には、何か痛々しいものが感じられる。それは、理想を思う心に加えて、そこにはせっぱ詰まった要請がこめられているからだろう。なぜなら、その願望が発したところの現実認識はとても苦いのだ。つまり、語りかける人は、この女性の過去は「無残な狂い」でしかなく、それらは沈黙の彼方の死へと打ち棄てられるべきものとする。そして最後の呼び掛けにも楽観は感じられない。「努めることの意義」は、夢の中でしか確かめられないのだし、忘れることの慰めを詩人は呼び掛けるのだが、それは、かく語り、また問うてきた言葉の、今や空しい熱気に対してさえ向けられているのだから。

なぜこんなに、慰めは優しく、そして決意は激しいのだろう。

なぜこんなに、求められた和合は、その凝集する力を冷え冷えとさせるのだ

ろう。

だから、〈これらの問いは、私たちに答えることよりも、更に問うことを促す。〉

しかしここには、私たちが自らに問いかける時の示唆となる一つの訴えが、夕暮に語る当の詩人から出されている。すなわち、呼びかけている詩人の署名は Renée Vivien、つまりこの詩は、一人の女性から〈女性〉に対してなされたものである。ルネ・ヴィヴィヤンは、フランス語を表現手段として選んだイギリスの女流詩人である。

この詩には、二種類の調子の声が聞き分けられるだろう。つまり〈整えられていった無防備を巡る静まりと狂暴〉である。対象である女性を理解した詩人は、その対象としての女性を取り込み、その動きを予測するまでの支配者になって行く。その理由の一つとして、社会的偏見に対する身構えと抗議を挙げて論じること、私たちはそれほど誘われはしない。私たちはそれよりも、夕暮の語りかけに耳を傾けることに続いて、〈自らに問いかけ続ける為の姿勢〉を、この詩から学びとりたいのだ。だから、解放への促しとして発せられた言葉が隷属の告知となっていること、そして、清澄な色調への希求が無色透明の沈黙に停滞してしまっていること、このことを認めた後に、つまり、こんなふうに頑なな孤立に至ってしまったこの詩のメッセージを受け取った後に、もう一度、女性から女性へのこの誠実な呼び掛けの中に、私達にとって、有効な二つの心の有り様を捉えたいのだ。

こう提案することの前提にあるのは、作られた女性像、作られた男性像のステレオタイプは容易には壊されないものであり、それらは私たちを大いに不自由にしているという理解である。その上で、第一に、自身を捉える〈ゼロ地点〉とも言うべきものを、この呼び掛けに認めたい。詩人がこうして設定した

夕暮に語りかけを聞く

「夕暮」は、その静まりの誠実さゆえに、やはり私たちすべてが、女、男を問わず、知るべき時である。そこでは私たちは、他者に対しては無色透明でいながら、自分自身にたいしては、その体積の全体量で沈黙していることができるのだから。その沈黙は、明快に満ちている。それは、誰にも有り得べき、身づくりの前の、最も穏やかな、〈とても単純な〉時である。

そして私たちは、呼びかけに対する第二の応答として、そこから出ていくことを思う。人と出会うために。屈服しないために用意する外皮は、数層にも及ぶだろう。それが第二の心の有り様である。幾つかの変装を試みる私たちがいるだろうし、姿の整えようを知らないまもうろたえることもあるだろう。そして私たちは、〈とても単純〉に、そこでは「女」も「男」も方法ではなくなることを願うのだ。

だから、〈この詩の誘いかけは、私たちにさらに問うことを促す〉。

Summary

## S'écouter parler

Taeko Uenishi

Voici une réflexion autour d'un appel fait au soir d'une femme à une autre femme. L'appel commence en harmonie avec le soir qui est le moment où l'on peut se retrouver, simple et chaste, libre de tout ornement. Ce que l'on y vit réside dans la simplicité et la chasteté d'être.

Puis survient la fureur dans la voix. L'appel à l'émancipation se change en annonce de servitude. Pourquoi cette soudaine pulsion dominatrice? Pourquoi ce ton lugubre contrastant avec la douceur du début?

De ce message double s'élève pour nous comme une sollicitation à sortir de nous-mêmes, à rejoindre l'univers d'autrui : sans le souci d'être soit une "femme", soit un "homme". Nous y serons simplement côte à côte avec autrui, comme l'on peut très simplement être dans l'harmonie du soir.